

序文……………原田正俊 4

I 臨終・死の儀礼と遺体

道教の死体観……………三浦國雄 7

日本古代中世の死の作法と東アジア……………原田正俊 24

契丹人貴族階層における追薦……………藤原崇人 49

佐藤一斎『哀敬編』について——日本陽明学者の新たな儒教葬祭書……………吾妻重二 65

北京におけるパンチェシ・ラマ六世の客死と葬送……………池尻陽子 83

II 鎮魂・追善と社会

慰霊としての「鎮」の創出——「鎮護国家」思想形成過程の一齣として……………佐藤文子 94

神泉苑御霊会と聖体護持……………西本昌弘 116

南北朝期における幕府の鎮魂仏事と五山禅林——文和三年の水陸会を中心に……………康昊 135

烈女・厲鬼・御霊——東アジアにおける自殺者・横死者の慰霊と祭祀……………井上智勝 159

照月寿光信女と近世七条仏師……………長谷洋一 181

華人の亡魂救済について——シンガポールの中元行事を中心に……………二階堂善弘 196



序文

原田正俊

人間にとって死をどうとらえるかの問題は、永遠の課題であり、世界の諸宗教、各地域の共同体において様々な思想や儀礼が形成されてきた。アジア諸地域においても、儒教・仏教・道教などによって死をどう考えるか、死にどう対処するのか、遺体をどう処理するのか、死後は何処へ行くのかなどが大きな課題となり、これらを含め様々な思想や儀礼が形成されてきた。

本書では、アジアにおける死と鎮魂についての文化を歴史学・思想史の立場から考察した論考を集めている。死をどのように迎えるかは切実な問題であり、生者はどのように死に対処し、社会の中でどう位置づけていくのか、様々な摸索がなされてきた。これらの多様な事象を紹介しながら考察を深めていきたい。

臨終や葬儀、鎮魂など儀礼の展開は、各時代、各地域において多様な展開をみせた。現実の切実な事態への対応から出発して儀礼が形成され、人々の心の平安を招く仕掛が整備されていく。儒教・仏教・道教は、盛んに死の意味づけ、儀式内容の意義を説き、社会のなかに儀礼を定着させてきた。また、死をどう迎えるかの方法も実際的なものから始まり、往生伝のような物語を作りだしさらに説話の世界にも広がっていった。

死後の世界は、儒教・仏教・道教でも語られ、仏教における極楽への往生は、人々が切望するものであり、死後の世界を意識することで死をめぐる文化はさらに広がった。また、前近代の人間にとって死後の世界を考えることは恐怖であり、これを回避するために現世における宗教的な生活規範の形成や修行の実践、儀式の編成が行われた。

権力者の死や政争における敗退者の死は、あらたな意味を生み出し、権力関係や政治状況にも影響を及ぼし

た。社会化された死は、大規模な鎮魂、追善の儀式を生み出し、新たな文化を創り出していった。王の身体や死が及ぼす負の作用はこれを鎮めることが様々な形で試みられた。鎮魂は社会の平安のためにも重要な課題であり儀式や政策が実行された。

戦乱・天災・飢饉・疫病の蔓延などによって大量死が生じると、死が持つ社会的な影響力は計り知れないものとなる。多数の死者達の存在は、その後の戦乱や天災などの具体的な事件に結びつけられ、大きな社会問題となるのである。また、政争による敗者、冤罪などで無念の思いで死去した人々は、社会に恐ろしい災厄をもたらすものとして畏怖された。これら大量死や現世に恨みを持つ死者に対しては、慰撫・鎮魂が必要とされ、国や共同体をあげての大規模な祭祀が展開された。日本において怨霊をなだめるための御霊会やアジア全体に広がった仏教・道教の影響のもと整備された水陸会などは、社会の平安を保つための重要な行事であった。

通常の死者においても、祖霊としての祭祀や鎮魂、追善は不可欠のもので、儒教・仏教・道教においても様々な思想が形成され儀式が執り行われた。

このように死をめぐる儀礼と思想は多様に展開するとともに、アジア全体で共通する要素も多い。儒教・仏教・道教のそれぞれが影響し合って儀礼を整備していった。祭祀の対象として絵画・仏像をはじめとした造形物をふくめ、歴史上の死をめぐる文化の大きさはきわめて大きいといえる。本論集においては、上記の課題意識を共有しながら、歴史学・思想史各分野の論文をまとめたものである。

第一部、「臨終・死の儀礼と遺体」では、三浦國雄氏論文が道教における死体観を論じている。穢れ観など日本への影響も含め示唆的な論考である。原田正俊論文では、平安時代の往生伝から鎌倉時代末の説話、僧伝を分析し、往生の形態の変遷を検討しながら、各宗派の主張と競合の実態を明らかにした。平安・鎌倉仏教の宗教者にとって往生の在り方が如何に重要課題であったかを示した。藤原崇人氏論文は、十世紀初頭から十二世紀前半にユーラシア東部に栄えた契丹における仏教による死者追薦の在り方を分析している。兜率往生・極楽往生への願いや殯の期間における儀式内容、寺院の関わりなど中国周辺地域における仏教儀礼の広がりをも

る上でも貴重である。

吾妻重二氏論文は、日本における儒教葬祭書の展開を論じる中で、佐藤一斎（一七七二～一八五九）の『哀敬編』を分析し、仏教との折衷様式の内容を指摘している。日本における儒教儀礼の受容の様相は後掲の井上智勝氏論文とも関連する。池尻陽子氏論文は、乾隆四五年（一七八〇）到北京で客死した、パンチェン・ラマ六世の葬送と慰霊塔の建立を詳しく紹介している。清朝皇帝とチベット仏教僧の関係をみる上で興味深い。

第Ⅱ部、「鎮魂・追善と社会」では、佐藤文子氏論文が日本古代の「鎮」という観念について分析を加え、死者となった天皇のための『梵網経』の講説、悔過などの機能を明らかにしている。天皇という特殊な地位にある者の死が社会化され、その死に対する対処が政策として定着していく。西本昌弘氏論文は、貞観五年（八六三）に行われた京都神泉苑御霊会を分析し、崇道天皇（早良親王）など御霊の選定の背景と目的を明らかにしている。祟りが警戒される死者に対する慰霊は仏教の力をもって国家の重要な儀式として社会に定着していった。康昊氏論文は、日本の南北朝期、文和三年（二三五四）の水陸会を採り上げ、室町幕府による大規模な鎮魂仏事であったことを明らかにしている。また、入元僧、渡来僧の関与についても考察し、東アジアにおける対外交流をもとにしたこの時期の鎮魂儀礼の変容を示している。

井上智勝氏は、東アジアにおける自殺者・横死者の慰霊と祭祀について、朝鮮・越南・日本の様相を総合的に考察している。十四・十五世紀における中華・朝鮮における鎮魂祭祀の仏教から儒教への変遷や近世の日本における受容など広い視野による指摘は重要である。長谷洋一氏は、京都長楽寺に伝来する過去帳、仏像銘を用いながら七条仏師の系譜を整理している。二階堂善弘氏は、現代のシンガポールにおける華人社会の亡魂救済の行事を紹介している。鎮魂儀礼の現代へのつながりを考える上でも興味深い。

以上、アジアにおける死と鎮魂・追善の社会的な意義と歴史の変遷の一部を示すことができたといえよう。議論はまだまだきぬ課題であるが、研究の進展を促すものになれば幸いである。また、本書と関連するものとして原田正俊編『宗教と儀礼の東アジア』（勉誠出版、二〇一七年）がある。あわせて御参照いただきたい。

尚、本論集は関西大学東西学術研究所、東アジア宗教儀礼班（二〇一六～二〇一八年）の活動成果である。